

若者の献血 増やしたい

献血への協力を呼びかける
県学生献血推進協議会長の
木村嘉男さん(左)ら＝熊本
市中央区の下通アーケード

7月は「愛の血液助け合い運動」月間。献血する若者の減少を食い止めようと、県内9大学の学生でつくる「県学生献血推進協議会」が15日、熊本市中央区の下通献血ルーム周辺で買い物客らに協力を呼びかけた。

県内9大学の学生が推進協

同世代に重要性呼び掛け

4月、下通アーケードにオープンした大型商業施設「COCOSA(ココサ)」。献血ルームは、その5階にある。若者に人気のファッションブランドが入るビルだけあって、献血ルームもガラス張りでおしゃれな雰囲気だ。

「ただいま、ココサ5階献血ルームで献血を行っております。ご協力お願いいたします」。協議会の学生約20人の呼び掛けが大勢の人が行き交うアーケード街に響く。

学生はそろいの黒いTシャツ姿で、背

中には英語で「献血で命を救おう」の文字。献血を呼びかけるプラカードを掲げながらポケットティッシュを配り、懸命にPRを続けた。

協議会が発足したのは1965年。当時は「学生献血連盟」という名称で、95年に改名した。本年度は約20人が参加。ハロウィーンやクリスマスに合わせ、県内のショッピングモールで献血を呼び掛けるイベントなどで活躍している。

東海大農学部3年の橘和一希さん(20)は昨年、住んでいた南阿蘇村で熊本地震を経験した。同学部の学生3人が亡くなったことで「献血が人の命につながっていることを強く意識するようになった」と打ち明ける。

県内で献血に足を運ぶ人は減少傾向にある。協力者のピークは1984年度の約19万7千人。2016年度は、3分の1以下の約6万2千人に減った。10～20代の若者も12年度からの5年間で、約2万人から約1万3千人に減少した。

「今の20代は、高校に献血バスが行く頻度が減った世代に当たる。高校時代に



献血を経験した人が少ないことが、若い協力者が減る要因になっているのではないかと県赤十字血液センター推進課の石原正朗さん(44)。「若者を中心に献血に呼び掛ける必要がある。そのためにも、同じ世代の協議会の活動は心強い」と話す。

血液検査の結果を受け取ることによって、貧血や糖尿病、動脈硬化などの傾向を知ることができる献血は、自分の健康状態の把握にも役立つ。会長で崇城大生物生命学部4年の木村嘉男さん(21)は「若い人に献血の重要性やメリットを伝え、協力者をもっと増やしたい」と力を込めた。(隅川俊彦)



献血協力者に記念品を渡す県学生
献血推進協議会の学生
＝熊本市中央区の下通献血ルーム



4月に大型商業施設「COCOSA」
の5階に移転オープンした下通献
血ルーム＝熊本市中央区